

Title	質疑応答
Author(s)	内村, 公義; 吉野, 大輔; 六郷, 颯志 他
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 90-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90079
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集3

第8回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）

テーマ「狭間からの呼び声：まちなか相談室「風の舎」に集う人々」

質疑応答

内村 公義 × 吉野 大輔 × 六郷 颯志 × 会場のみなさま

小西真理子（大阪大学教員）：堀江さん、お願いします。

堀江剛（大阪大学教員）：こんにちは。ほんまさんと小西さんと同じで、臨床哲学で教員をやってます、堀江といいます。今日は、六郷さん、それから内村さん、吉野さん、素晴らしいというか、非常に良いお話が聞けたと、感謝したいと思います。ひとつ質問です。僕も哲学をずっとやってきたので、哲学関連で、ぜひ吉野さんに聞きたいです。苦しみとか苦悩を、先延ばしにするというか、それが深まっていくっていうか、それによって死というものを延ばすというか、そんな経験をされたということをお話されていて、哲学ってそういうものだからか、共感しました。僕だったら、遺書じゃなくて論文なんですけど。論文書こうと思って、言いたいこととか、はっきりさせたいことが次々と出てきて、でも、違うこれじゃないということが続いていく。そういう探求をしていく過程の中で、結果としてできるのは論文だとしても、そこで次々に自分が悩みながら続けているその作業を、僕は快樂っていうふうに感じているんですけども、吉野さんの中に遺書を書く快樂みたいな、なんかそういう感じっていうのはあったのか。それから、言葉を繋いでいくその楽しさ、そういうものがあつたのになつていうのを、ぜひ聞きたいなと思いました。

吉野：本当おっしゃる通りで、そもそもの話ですけど、遺書って完結させなきゃいかんわけですね。知るというのと分かるというのの違い。数学とか物理では、分かることができるものには解がある。円周率みたいにずっと永遠に数字が続いていく、それを探っていく、それが知るってことだと思います。哲学は、ぼくにとっては、とにかく知り続けるものです。ある程度発見のよろこびがあるんだけど、それは解ではなくて、さらにその先に新たな謎が出てくる。ずっと深追いしていく。それをするのに役立つのが哲学である。明確になってくる部分もある一方で、謎も深まる。だから永遠に終わらんわけですよ。完結しない。だから、遺書ができんから死ぬわけにはいかん。考えれば考えるほど、死が遠のいていく。先生は論文を書いている。僕はどうしているかという、今気づいたんですけど、僕は遺書をやっている。つまり、遺書を「生きている」です。だからもう、僕、20歳以降、生きていることが、生き様がそのまま僕の遺書だって感じになってきました。

小西：ありがとうございます。他に質問がある方いらっしゃいますか。

橋本亮（大阪大学倫理学専修卒業生、精神科医）：今日は御三方、素晴らしいご講演をありがとうございます。ここの倫理学・臨床哲学の卒業生で、卒業した後、精神科医をやっている者です。今日は制度に取りこぼされるっていう話を聴きたくて参加しました。やっぱりあの、いろんなご家庭を見ても、病院以外に居場所がないっていう方が非常に多くて、かといって家にもいれないっていう方がいて、その人たちと、どういうふうにかかわっていくか、どういった手法を提案しようかっていうのをすごく考えているんですけども。自分が相手に対して何かをしてくださいっていうのは、ある意味制度の押し付けをしてしまっているっていう、反省をされていて。行政を通じた居場所がありますっていうことが言われているけれども、そこには制度しかないっていうことで、結構、医療側としても、全部自分たちでやってしまうと本人たちのセルフケアっていうものも奪ってしまうことになりかねないと、ジレンマに苛まれています。なかなか限界もあるんですけど、医療の枠組みでもっとこういうふうなものが、もし街の中に居場所、障害を持つ方やいろんな方がいらっしゃるような居場所があればな、というのが願いですが、それについて御三方のご意見お聞きしたいなと思います。

小西：ご質問ありがとうございます。今の質問はみなさんにお答えいただきたいなと思いますので、発表順にお願いしたいと思います。じゃあ、内村さんからお願いします。

内村：はじめちょっと聞き取りにくいところもあって、ひょっとしたらとんちんかんな話をするかもしれませんが、お許してください。初めに、自分の講演のパートでちょっと申し上げたことと関係すると思うんですが、私は一方では制度の中でやっているというところがあって、もう一方で制度外でやっているというところがあります。先程の講演では制度内の話はしません、ということでしたが、私は、やっぱり制度内でできることも非常に大事だと思います。ただ、これは六郷さんが言うことになるかもしれないんだけど、彼がメンタルフレンドの O さんとの関わりの中で感じたことで、彼女が自分の境界みたいなものを越えたというような場面があるわけですね。ここはなかなか難しいんだけど、O さんは自分の職務の枠の中でできることをやるべきというふうなことが一方ではある。それを壊してしまっただけで困るわけですよ。しかし、実際にはその枠を少し越える形で中学生の六郷さんに関わっている。つまり、あくまで制度の枠の中で、しかしどうその枠をちょっと越えていけるか、ということが非常に大事なこととしてあるんじゃないのかなあという事は思います。私も少年センターの専門相談員として、例えば、今日 3 人の方と各 50 分の相談を受ける、その中で解決まではどうしてもいかない、でも問題の所在くらいは見えてくる、けどそこから先どうするかは自分の果たすべき責任外、あるいは場合によっては権限外になることもある。そのとき放置できるか、そのまま関わらないでいられるか、ということでもいつも悩

んでいるということがあります。ただその中でやっぱり、自分が与えられている枠組みというふうなことから、ちょっとでも、どうすれば越えていけるのか、それを考えています。その場合、一スタッフとしてとか、一職員としてとか、一メンバーとしてということよりも、もうひとつ前の、一人の人間として、というような姿勢を、どれだけ持ち続けていくのが、一番大切なんじゃないのかなあという思いがしています。たとえば私が今日話したような、「風の舎」でのいろんな人たちとの関わりは、それは制度の外だからこそできるという面がある、けども、それをどう枠の中でやっていけるのかというのが、実際には多くの方々が一番悩んでらっしゃる問題なのかなと思います。

吉野：えっと、僕が言える立場なのかどうかっていうのが、正直あるんですけども。制度は、やっぱり使っても良いんですけどね。でも一方で、ニーズに応えてくれない制度もあったりするのもまた現実で。つい最近、職安の人に、僕の「風の舎」の経験を使って、立ち上がったばかりの障害者支援施設の仕事を受けてみないかと言われたんです。僕、力になれるかなと思って、面接受けました。履歴書も渡して。そうしたら、なんか話が噛み合わないので。「風の舎」の常識が世間の非常識と、僕らはふざけて言っていたけれども、本当にそうで。理念が全然違う。方向性も違う。やり方も違う。考え方もそもそも違う。不採用になりました。でも、不採用になったことを告げられたことよりも辛いことがあった。それは何かというと、職安の担当者が、理解してくれていたと思っていたのに、僕の言い分をまったく聞いてくれなかったこと、つまり、精神障害者というだけで、聞く耳持たなかったこと。これが我々にとって一番苦しいです。例えば、危険性とか、ニュースでも精神科の通院歴があるかないかみたいなことが言われるのは、精神病だけでしょ。なぜか精神障害者っていうと、そういうのがつきまとう。さっきの福祉施設の人にも僕を不採用にした向こうの理由があったんですよ。でも、僕の言うてないことを理由にしているんですよ。職安では、それをそのまま一方的に、あれ言うたでしょ、これ言うたでしょって言われて、僕の言うことを全く聞いてくれない。信用してない。そういう苦しみ。制度以前の問題で、人としてまだ認められていない。僻地に監禁されているような、閉じ込められているような、社会にいない存在として世の中が成り立っている部分がまだ見えるなど、当事者としては思います。

六郷：すみません、質問の意味を噛み砕くのに時間がかかってしまいました。自分なりにご質問の意味合いを考えてみると、今回のフォーラムで話がいくつかあって、そういうことを踏まえた上で、その上でどういうことができるのか、どういう試みが可能なのか、そういうことをおっしゃっているのかなと理解しました。そうですね、自分自身というものをこのフォーラムの内容に関連づけて言うのであれば、支援を受ける側という視点からお答えさせていただくと、発表の中でも触れてはいると思うのですが、自分の中で、支援というか、手助けというか、差し伸べられたっていうか、そういうものっていうのは、かなり強く個人っていうものと結びついてたわけですよ。こうしてくれた誰々、ああしてくれた誰々先生、

という形で自分の記憶の中には残っているし、それがあくまで自分の中では、このフォーラムでいう制度の外っていうものとニアリーイコールでもあるわけです。そういう前提を踏まえて、さっきの質問にお答えすると、何か場所であるとか、あるいは仕組みであるとか、そういったものを支援というものと結びつけていくのは自分には難しいですね。なんて言えば良いんでしょう。支援制度の内と外とえば、外で起こった出来事に支えられてきた、みたいなものが自分の一番根本的な認識で、逆に外側から制度をどうしていけば良いのか、どういう仕組みなり場所なりを考えていけるのかみたいなふうに、問いかけられると答えに詰まってしまうとか、立ち止まってしまう。ただやっぱりそこで答えがぱっと出ないとか、どうしようもないとか、やっぱり言ってしまえば、今日の発表をして、その上でどうするんですかと聞かれたら沈黙してしまうというのが、今回のフォーラムの主題の一番難しいところなのかなと思います。

内村：今のこともちょっと関連はするんですが、先ほど申し上げたことも関連するんですけど、初めこの部屋〔フォーラムの会場〕に来て、みなさんが準備していらっしゃる姿を見て、僕はものすごく嬉しかった。心温まる感じがした。何がっていうとね、手作り感とか、小西先生が椅子を出して並べてらっしゃって、ほんま先生がライトの角度を直していらっしゃった。どういう制度もね、はじめは小さいところから作っていくわけですよ。はじめからでき上がったものとしてあるわけではなくて。でも、でき上がってしまって、完成されてしまったら、もう違うものになってしまうというようなところがあるので、その意味では、制度というものが作られていく、その一番最初の手作り感みたいのところに戻っていくのが大事なかなという感じがします。私が最後に話をした、ある73歳の精神障害者の話とも関係します。たとえば何々する会とか、何々する組織っていうのができてしまったら、そこでは何々をするという話になるんだけど、そういうものがまだないんだけど、しかし、何かそういう場を自分で作ろうとして何か動き始めるという、そのあたりの、制度なるものの初心というところに、もう一回立ち返って行く、というのが制度を考える場合には大切なかもしれないな、とそんなことを思いました。

小西：ありがとうございます。Zoom参加の方からチャットを通じて質問が届いています。質問を読み上げます。「内村さんに質問があります。目的を持たないつながら・かわりは大変大切に、自分もやっていきたいと思うのですが、制度としての支援の「補完」のように位置付けられることに、ちょっと悔しさも感じてしまいます。そういうふうに考えない方がいいですか。」というご質問です。

内村：そうねえ。補完かもしれんという思いはあるんですけども。ただ、なんて言ったらいいだろうかなあ。補完かもしれないと思うのだけれども、一方では補完でもいいや、という気持ちもあるんです。というより、やっぱり、たとえば目的なく来ることのできる場所、

それを作りたいというふうに言いました。自分から何か作ろうとするのはね、これはこれで大切なんです。だから、どちらでもいいという話では全くないんです。しかし、こうすべきだという話でもない。私の好みだけの話ですが、やっぱり、向こうからやってくるものにどう対応するか、ということが大切なのであって、だから、自分の活動が補完的なものなのか、それともオリジナルなものなのかということ自体は、僕はあまり問題にしない。補完であれなんであれ、とにかくそこで、何かある支えを見つけることができる人がいれば、それでいいんじゃないの、という感じです。

小西：ありがとうございます。わたしも今のお話を聞いて、おそらく、内村さんが今日の講演で紹介されたような方たちや、「風の舎」で時間を過ごされたようないろんな人たちにとってはきっと、おそらくその場所は、補完というような位置付けではなかったんじゃないかなと思いますね。制度というものがあるから、そういう場所が補完的であるという発想になるけれど、きっとそれぞれの人にとっては違うのではないかなと、私はそういう感想を持ちました。ありがとうございます。では、少し時間が過ぎているのですが、最後に何か質問されたい方いますか。

韓仁傑（大阪大学修士課程院生）：臨床哲学研究室 M2 の韓仁傑と申します。吉野さんにひとつ伺いたいことがあります。さっき「風の舎」に引きこもるということをおっしゃられて、それに興味があります。引きこもりは社会から離れて、社会参加を拒否する人たちですよ。吉野さんがおっしゃった「引きこもり」という表現は、ただの比喩ですか。それとも、本当は「風の舎」は、吉野さんにとっては、社会と対立しているもう一つの家のような場所なのでしょうか。

吉野：えっとですね、なんていうか、引きこもるために出かけるというのは、要するに、他に行き場がない。多分、さっき話した通り、僕に見合ったサービスを受けられるところもない。現状では、普通に働くと、障害者の枠で働くとなると、結局、僕はずっと繰り返し、企業に居場所を求めることになる。社会が求めるのはこういう形であり、その形が制度というものに近いものです。この会社のやり方に適応しなさい、っていうやり方なんです。僕、ブラック企業にしか就職していないんです。1日12時間労働とか。それで結局、そこで働いて、発症して、入院することになるんです。入院して、早くても数ヶ月か半年くらいの単位で、医療スタッフ、いっぱいスタッフに助けてもらいながら、徐々に症状を緩和して、日常生活を営めるまでに回復するんです。でも、また企業に勤めて、自分の居場所がそこにしかないって企業に合わせようとする、また発症する。もうずっと永遠にこれを繰り返すんです。もう疲れちゃって。「風の舎」っていうところは、合わせる基準がそもそもないから、とにかく私に興味を持ってきて、とにかく質問がバンバンくるんですね。「なぜ?」「どうして?」、教えてって。ニーズがあったっていうか。でも、社会的に見れば、何

ていうんだろうなあ、行き場がないから、ただ「風の舎」に引きこもったってことになるかなって。

内村：「風の舎」に来て引きこもれたということは、そこでやっぱり、本当に孤独になったということかな。孤独になるということは、自分と本当に対話するという、そういうことができる場になったのかなという気はするんだけどね。「最後まで自分と一緒にいる人間は自分だ」みたいな言い方があるけれど、そういう、本当に自分と向き合う意味での孤独になれる、という意味での引きこもり。ところが周りの引きこもりはそうではないわけで、とにかく自分とどう向き合うかということじゃなくて、社会にどう適応するかということに向き合うわけで、適応過剰みたいになって、きつくなって引きこもっている。でも、「風の舎」では、本当に一人の人間になりうるというか。そういう意味では、孤独になるために、家を出て「風の舎」に行ったということかもしれないと、吉野さんを見てて思うんだけど。

吉野：親心というのが、ありがたいような、厄介なやつで。「死にたい」って思わず言葉出るでしょ。そうすると真っ向から否定してくるんですよ。気持ちは分かるんですよ。「死にたいなんて言わないで」とか、「そういうふうには悩んでいいじゃん」とか。気持ちは分かるんだけど。当たり前を求めるといって、親御さんがよくやりがちなことだと思うんだけど、その当たり前になれんからそもそも苦しんどるんだけど、親だからこそ、通じない。それで、それから逃避するように、逃れるように「風の舎」に行っていた。そこで引きこもっていた。

内村：だから吉野さんは、親が心配してくるけど、「俺の心配せんと、自分の人生生きてくれ」というわけやな。

吉野：僕らはですね、精神障害者に限らんと思うんですけど、苦しみの一つが、大きな苦しみの一つが、親に迷惑をかけているということなんです。親に迷惑をかけているとか、気を遣わせているとか、いつまで経っても親に世話をさせているとか、これがね、めっちゃくちゃ重いんですよ。だから自己否定感も高まる。僕が代表を務めている「風まかせ」の自助グループで、親御さんたちのお話を聞くたびに、障害をお持ちの息子さんとか娘さんとかの苦勞を奪わないで、自分の人生歩んで、自分の苦勞をしてちょうだい、思い切り自分の人生歩んでよ、僕らの苦勞奪わないで、と思います。

小西：どうもありがとうございます。それでは、時間も過ぎているので、今日はここまでにしたいと思います。御三方、どうもありがとうございました。(会場から拍手)では、ここまでです。ご参加いただいたみなさん、ありがとうございました。

(文字起こし・文責：二宮晃紀)